

■小平浪平 実業家。工業振興のリーダー足らんと大志を抱き、久原房之助に出会って、日立製作所の礎をつくるに至った。

おだいらなみへい

佐賀の乱・・・1874＝ 栃木県下都賀郡家中町(都賀町)で、素封家小平惣八の次男に生まれる。

明治14年政変1881＝ 7歳：

岩倉具視没・1883＝ 9歳：

父が様々な事業に手を出しては失敗するような家に育ち、

帝国憲法発布1889＝15歳：

帝国議会始・1890＝16歳：父が多額の借財を残して、病没。秀才だった兄が第一高等学校を中退して、地元の銀行に就職するなか、

大津事件・・・1891＝17歳：東京英語学校を卒業して、第一高等学校に入学。

大本教・・・1892＝18歳：

スポーツに興じ、旅行をし、美術にも関心抱いて、学業がおろそかになり、

日清戦争始・1894＝20歳：

東京帝国大学工科大学電気工学科に進むも、写真機に凝って、落第も経験しするうち、

子規句歌革新1898＝24歳： 欧米の雑誌を見て工業振興の必要性を痛感、そのリーダー足らんと大志を抱くようになり、

ピアノ国産化・1900＝26歳：卒業すると、合名会社藤田組に入社し、電気技師として、久原房之助が所長を務める小坂鉱山に赴任、

田中正造直訴1901＝27歳：

教科書疑獄・1902＝28歳：先輩竹内維彦とともに自熔製錬法完成、鉱山を再生させる。電気の魅力にはまり、電気課長になるも、

日比谷公園・1903＝29歳：再建直後に藤田組の同族経営に亀裂が生じ、

日露戦争始・1904＝30歳：久原が所長を辞任したのに従い退職、1年契約で広島水力電気の主任技師を務めた後、

日露戦争終・1905＝31歳：東京電燈会社に入社し、駒橋発電所建設に従事するが、外国人技師を絶対視する会社に不満を持つうち、

満鉄発足・・・1906＝32歳：久原鉱業所日立鉱山を始めた久原から勧誘を受け、すでに家族を抱えて不安ながらも、夢が勝り、入社。

韓国反日暴動1907＝33歳：日立鉱山工作課長に就任。鉱山用水力発電所の建設・運転と鉱山用電気機械の修理を手がけたが、当時の事情から修理といっても事実上は新規製作に近いものも多く、次第に設計・製作技術が蓄積され、浪平の魅力に惹かれ、小会社ながら帝大卒業生も結集、やがて鉱山用のすべての機械を自家製作する体制を築き、

韓国併合・・・1910＝36歳：電動機を完成。徒弟養成所を開設。竹内維彦と画策して、久原の承認を取付け、強引に製作工場を建設、

大逆事件判決1911＝37歳：日立製作所として操業開始。外販活動も活発に行い、まず茨城電気に変圧器20台を納入、

明治天皇没・1912＝38歳：久原鉱業所の一事業所となり、主事に就任。鉱業所の株式会社化とともに、同社日立製作所となる。以後、

第一次大戦始1914＝40歳：電気機械の製作指導に専念、東大工科大学卒の工学士安川第五郎らを採用、発展の布石も打つ。

試験係を置く。第一次大戦勃発で、外国電気機械輸入途絶、待望の大型電気製品の引き合いも出始め、

この間、売上は数倍になり、巨額の利益も得るようになると、将来のため内部留保にも努める。

久原鉱業所からの分離独立を申し入れるも退けられるが、

電線工場を建設、

ロシア革命・1917＝43歳：試験係を課に昇格させ、研究係を加える。久原工業所の佃島製作所が移管されて亀戸工場となり、日本初

本格政党内閣1918＝44歳

の総合電気機械メーカーとなるとともに、本社を東京に移転。

ベルサイユ条約・1919＝45歳：日立の変圧器工場から出火し、装置や仕掛品の多くを失うが、

大暴落・・・1920＝46歳：久原鉱業会社からの独立が認められ、株式会社日立製作所となり、所長から社長に転じる。

原敬首相暗殺1921＝47歳：徒弟養成所修了者を対象に日立工手学校を開設。機関車製造にも乗出す。日本汽船笠戸造船所買収など、

久原鉱業が苦境に陥って行くなか、なお久原の要求に応じて、支援し続けるが、

震災でライバル社の多くが打撃を受けたこともあって、さらに発展。

護憲三派圧勝1924＝50歳：久原の要求を断るべく進退伺いを出して、ついに自主経営も認められ

治安維持法・1925＝51歳：狭軌初の電気機関車を完成し、世界的なニュースに。受注高で業界首位の芝浦製作所と並ぶに至る。

円本時代始・1926＝52歳：軍事教練を目的とする日立青年訓練所を設立。アメリカに扇風機を初輸出、

金融恐慌・・・1927＝53歳：電気冷蔵庫の開発にも成功。金融恐慌で久原鉱業が破綻して、鮎川義介に譲渡されたことから、日産コン

ツェルンの一員となり、鮎川義介が会長に就任。不況が進むなか、

共産党事件・1928＝54歳：実業補習学校令施行で、徒弟養成所は日立工業専修学校となり、工手学校はその研究科となる。

世界恐慌・・・1929＝55歳：昭和肥料から商工省東京工業試験所が開発した技術を利用した合成硫酸生産設備を受注、

海軍軍縮条約1930＝56歳：プラント生産の経験は無かったが、決断し、プロジェクトチームを編成して完成させ、

満州事変・・・1931＝57歳：昭和肥料川崎工場で日本初の国産技術による合成硫酸生産を実現するなどして、苦境脱出。

国際連盟脱退1933＝58歳：特許係も設置、以後、特許・実用新案申請件数は同業他社を大きく引き離して行く。大型冷凍機を阪急百貨

店に、エレベーターの第1号機を東和アパートに納入。短期間に、世界最大のモーターを完成させて八幡製

鉄所に納入、日立の名を一気に高め、

帝人疑獄事件1934＝60歳：研究係を母体に日立研究所を設立。

芥川直木賞始1935＝61歳：中学校令の公布に伴い、日立工業専修学校と日立青年訓練所を合併し、日立工業青年学校が設立される。

二二六事件・1936＝62歳：造船業に進出。大鉄百貨店にエスカレーター第1号機を納入するなど、総合電機メーカーに発展、

日中戦争始・1937＝63歳：旧戸畑鋳物を吸収合併。日産コンツェルンも三井、三菱に次ぐ企業集団となる。

健保+総動員 1938＝64歳：軍部からの強い要請に、本社に軍需部を設置し、初代部長に倉田主税を就任させる。

第二次大戦始1939＝65歳：大阪瓦斯電気工業を吸収合併の上、主要事業部門を三分割し、日立航空機、兵器、工作機を設立。

大政翼賛会・1940＝66歳：陸軍秘密工場だった理研真空工業を吸収合併して茂原工場とする。

日米開戦・・・1941＝67歳：日立工作機に日立傘下の国産精機、篠原機械を吸収合併し、日立精機に改称。反骨精神は相変わらずで、

鮎川義介が会長を退任するに当たり、日産コンツェルンの統括を要請されるも断り、軍需生産に集中、

・・・1942＝68歳：東京国分寺に中央研究所を開設。

年金+総武装 1944＝70歳：3年前に昭和鉱業と共同出資で設立した日昭電線伸銅を吸収合併の上、摂津工場とした。

敗戦・・・1945＝71歳：敗戦後、迅速な意思決定によって混乱を回避し、工場再建に奔走するが、

新憲法公布・1946＝72歳：

新憲法施行・1947＝73歳：公職追放となる。社長を倉田主税に譲り、

独立回復・・・1951＝77歳：解除後、日立工場を訪れて従業員を慰労し、まもなく、没した。